「日々の理科」（第 3142 号）　2023,-3,14

「ヒヤシンスを持ちかえる（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

去年の秋に１年生の子どもたちが、一人ひとりの鉢に植えたヒヤシンス・・・１月２月は非常に寒く、雪も降ったが、すこやかに育った。ほとんどの子どもの鉢には、色とりどりのヒヤシンスが咲いて、１年生の花壇の前は、甘い匂いに包まれている。

終業式まで 10 日になり、家庭学習日や遠足、春分の日もあり、１年生が学校に来るのも５日しかない。そろそろヒヤシンスももち帰らなければいけない。

３組の音楽の先生が考えた方法が秀逸だった。まず、画用紙で即席の「紙鉢」をつくる。新聞の広告を折って、ごみ入れを作るのと同じ要領だ。担任が丁寧に教えれば、初めての一年生でも作ることができる。そこに土ごと「移植」して、そのままスーパーのレジ袋などに入れて持ち帰るのだ。

鉢は２年生でも使う予定だし、鉢ごともち帰るのは、１年生には少し厳しい。この方法なら土の量も減らせるし、家にある鉢やプランターに再移植できる。

ヒヤシンスの根は、鉢一杯にまん延している。できるだけ根を傷めないように、土ごと掘り出したいのだが、一人では難しく、友達と協力する姿も見られた。

この子どものように、球根・花・根と土が完全に分離してしまった子どももいた。しかし、ヒヤシンスは水栽培でも花を咲かせるほど丈夫な植物なので、この状態からもう一度土に植えれば、確実に生き延びる。特に土栽培の球根は、養分を温存しているので丈夫だ。